

小さな挑戦

南アルプス市立白根御勅使中学校二年 小野 唯

「あの赤いマークは、なんだろう。」

「スイスの国旗かな。」

「どこかのブランド品かな。」

これは、私がまだ小学五年生だった頃の出来事です。今、考えるとなんだか、とても恥ずかしい気持ちになるけれど、あの出来事のおかげで、今の私があります。

小学校五年生の夏、私の親戚に不幸があったため、両親と一緒に東京に行くことになりました。東京は、きれいなお店がたくさんあって楽しいところだけど、人も多くて、小学生の私には、全てが新しい経験でした。

都内の移動には、電車を利用しました。電車にも、山梨県では考えられないくらい、たくさんの人が乗っていました。日本の方以外にも各国の外国人なども乗っていたので、なんだか異国の地に来たような気持ちになりました。幼い私には、その状況がとても新鮮でした。分刻みで入れ替わる乗客に目を奪われながら、時間が過ぎていきました。しばらくすると、一人の若い女の人が乗車してきて、私の向かいの席に座りました。名前も知らないけれど、外見だけで判断すると私よりも少し年上の高校生か大学生くらいに見えました。

「遊びに行くのかな。」

「お出掛けするのかな。」

新鮮な状況のなかで、ただ、目の前の情報だけを頼りに、私の想像が大きく膨らんでいきました。その女の人は、黒いショートカットヘアーに、白いショルダーバックが印象的な、とても可愛らしい女の人でしたが、ある「モノ」が目飛び込んできました。

それは、白いショルダーバックに付けられた、「赤い背景」に「白い十字架」と「白いハートマーク」が描かれた少し大きめの「キーホルダー」でした。赤い背景なので、とても目立つ「キーホルダー」でした。当時の私には、それが何かも分からず、目の前の情報だけを頼りに「スイスの国旗」や「どこかのブランド品」と考えていました。それは、とても印象的なデザインで、覚えやすかったこともあり、家に帰ったら、早速調べることにしました。

「え！」

私は、言葉を失いました。あれは「スイスの国旗」でも「ブランド品のキーホルダー」でもなく、「ヘルプマーク」というものでした。

ヘルプマークとは、周囲の人たちに、なんらかの支援や配慮が必要であることを伝えるためのものです。周囲に伝えることで、どこにいてもサポートしてもらいやすくすることができます。ヘルプマークの歴史は、平成二十三年の東日本大震災時に、支援を必要とする方々が、周囲に上手に伝えることができなかったことが発端となっており、その教訓を活かして、東京都で作成されました。

私は、ヘルプマークを知らなかったことをとても恥ずかしく思いました。なぜなら、女の人が発信していたメッセージを正しく受け取ることができなかったからです。実際は、何かのサポートが必要だったのかもしれません。お互いにメッセージを発信していたのにその思いは決して交わることができません。私は、発信側と受信側に、なんだか溝があるように感じたので、この出来事以降、どのようにしたらよいのか考えるようになりました。私は、二つのことが大切だと考えます。

一つ目は、自分から勇気を持って発信することです。私は、困ったり、悩んだりしたことがあっても、周囲に自らサポートを求めたりすることが、あまり得意ではありません。そのため、あの女の方は、とても勇気のある行動をしていたと思います。人は、一人で生きていくことはできません。周囲に助けられながら豊かな生活を送ることができるので私も自らメッセージを発信できるような勇気のある大人になりたいと考えています。

二つ目は、受信側である私たちが、サポートの仕組みなどについて、更に理解を深めていくことです。発信側が、どんなに勇気を持って発信しても、受信する私たちが、正しく受け止めなければ意思疎通はできないし、正しいサポートもできません。ヘルプマークに限らず、世の中にもっと啓蒙する活動も必要だと考えています。

「ジェンダー」など、現代社会は、誰もが公平で平等な社会です。しかし、日常生活や日々の事件などを見ていると、他人に関心を持たず、自分さえ良ければよいといった風潮があるように感じており、少し残念な気持ちになります。私たち一人ひとりが、他人事とせず、周囲に関心を持っていくことで、必ず明るい未来が実現すると考えています。

「何かお手伝いしましょうか？」

山梨県内でもヘルプマークを見かけるようになりました。小さなことですが、自分から発信することができるようになりました。

私の明るい未来に向けた、「小さな挑戦」は、まだ始まったばかりです。